



謡曲拾葉抄

三井寺
玉葛
櫻河
浮舟
角田川

共



三井寺



三井寺ハ号ニ園城寺ト又云ニ三院三王院山號名古仙
 靈^{イニクシ}窟^{コウ}伏藏^{フツサウ}地^チ佐々名實^ミ長等^{ナカラサント}山^{サン}本尊^{ホンソン}ハ弥勒^{ミツレ}天智^{テンチ}天
 武持統^{ムツトウ}三代之勅願^{チツクワン}太友皇子^{トウユウ}之建立^{チケンリツ}也^{ナリ}
 天智天皇初欲創^{シロ}伽藍^{カラン}求勝^{ムカシ}地^チ未得^{ムク}七年二月三日
 の夜天皇の夢よ一沙門來て奏曰西北之山よ有
 矣岨^{イニクシ}と云々是^{コト}後^{ノチ}彼^ノ方^ヲを^シ見^ル所^ニふ^ル也^{ナリ}光明^{クワウミョウ}細^{ホソ}く
 けり^ト云々^ト十余丈^ト則^チ行者^{コウジャ}有^リく^ル所^ニ後^{ノチ}あり^ト其
 有^リ屋廬^{イロ}傍^{ナリ}に^テ滝^{タキ}あり^ト有^リ優婆塞^{ウパサイ}經^{キョウ}の念^{ネン}涌^{ユウ}と^シ其
 容^{ヨウ}依^レ非^ス常^ト人^ニ干^ス時^ヲお^シ遠^ク白^ク帝^ニ曰^ク此^ノ地^ニハ古^クは^シ吳^ニ
 渥^{ワツ}伏^{フツ}菟^ト地^ニ依^ルく^ル名^ヲ實^ニ長^ク等^ト山^ニゆ^ゝけ^レい^ハ已^ニと^シ不^レ見^ル

三井寺

大悲大悲といハ観音乃慈悲よのつねよりりく
廣大なるりぐあよりくろく。天台頂法師観音玄
義云初以大悲拔苦後以大慈与樂矣

正観音経曰三世諸佛大悲集一體観世音ハ寒
ハ熱奈洛迦大悲一人代受苦 観世音とい世
の音と観とると云く。観音ハ耳根圓通の菩
薩なりといハ。麻生ハの音あまを観トく脚けはを
さしともまハ田村小波と。あまの字をハ実也

一 杯下念於觀音

一といとるハ一たひまといとるこ 観音品曰同是

観世音菩薩一心称名観世音菩薩即時観其音声

皆得解脱矣

甲斐ハ融よまとい。たつる来よなれも花咲ハ田村よ

おー睡眠の内小あたるなる買多ととありては

睡眠ハ二字共よゆありといふこ。

説文曰睡坐寐也矣 増韻云今睡眠同称矣

買多ハ多持なる多と。買ハ心くくぬりの
あまとい。此の多くを多中ハなるいふも心
多のことい。菩提心海よみくさり。

法華曰若於夢中但見妙事 下畧

一 及園城寺 一列ハ田村小波と

又今夜ハ八月一五夜明月よくしほ

八月十五夜と名月として類とり夜和漢より久し。或云婁宿より南より必清明也。婁宿、令狗の姓也。故より令氣のさやうなるが、この月より和して令水相生の時なるは清のなるは実もあつた。世より歌ふ大うと李唐の世より壺ありと。唐人文人其、休多し。但古樂府、婦、嫁、怨の曲あり。漢人の中秋の月なるは小なり。此曲と依りて、色、細きハ漢の世よりひりりすと、久くより。歐陽詹が月と弦が待の序より。此時の中惟秋の、清明なるをとり

本朝文粹第八云 紀納言 八月十五夜者天之秋月

之望也更闌今定雲浄月明十二廻中并勝於此夕之好 下畧 續古今集天曆帝御製

「月毎は八月をれ、今宵の月小似る月をり」

皆々講堂の庭より月と詠を中とねい

講堂ハ経論聖教傳尺幅をとりしと、不ととて、七堂伽藍の内也。安樂行品曰若、経行處若在講堂中不共住止。東坡絶句云今夜生公講堂月滿庭依旧冷如霜

之并ちの講堂及、経流ハる氏の建、ちて

▲類月の名をとり月の今宵月とて、宗初連方乃、後句よ

古今為家世志賀の山神といふ。小石河より三井ありありの山と云く。袖中世志賀の山と云く。小石川の滝のうへより登りて。如志賀の山と云く。らくと云くあり。俗に経教の記之後一巻の山の時殿上人知事道遠のうへより志賀の山と云く。はと云く。

狭めの末の湖の湖照ひの山と云く

即列湖の竹生湯は流と。ひえの山の山と云く。廣雅云湖太池也。水照か。又、山海の潮照と云く。え来りて。水と云く。くろくも。月乃きり。海よさ。うつと云く。

世小天の山と云く。山と云く。湖照やひえの山と云く。湖照の山と云く。湖照の山と云く。

上と云く。此散心を云く

世の法を云く。世の法を云く。世の法を云く。世の法を云く。世の法を云く。

あの山と云く。畜歎と云く。親子の山と云く。

譚子畷漁篇曰夫禽獸之于人也何異有巢穴之居有夫婦之配有父子之性有死生之情烏反哺仁也隼憫胎義也蜂有君礼也羊跪乳智也雉不再接信也熟究其道万物之中五常百行无所不有也。

○之維乃乃るくゆるあもつとみとあふたやまきよふん家

子乃の糸とも白糸の乱きらやねん

ふい乱きやともいおるん糸よこもるこ。

釈名曰心者織也織細微也 後拾遺序云つ

と糸のつこも白糸のありひもろつこも

乃乃秋と捨くゆり月又ぬ里よほろもるこ

○まきあふつとん捨くりはるるこ里よほらあつ

田舎も位よりく〜 おろつとい福の中と云也

夫亦、あふれ、強り麻衣あふり田舎よこもあふれ 仲心

海といふ浪や志賀幸崎のひとりね

さ浪い志賀といふん松河と 万葉集よ樂々浪

神樂声浪と云日本紀よ狭々浪と云。

唐韻曰泊酒淺水見 通材集云さう浪のこと

く小なるるこさう。 詞林采葉云彼仙人佐々

名實長等と管〜より。志賀幸崎の外。湖水の

色乃心海と神波〜ありこ。文畧 袖中拈云こ

あ〜さ〜るるこ。さうら〜の廣畧こさう

唐崎ハ云三津濱日本紀よ可樂崎と云。

神道密記云唐崎神社江列志賀郡三津濱住居人

皇三十五代舒明天皇御宇女別當社口傳有之一

云松精神也琴御館婦女祭之 神祇拾遺云唐

崎女別當社件社ハ日吉木宮法度の初也抄よ

全後記と抄ひく二年計祿奉後。女別當寺三井寺にて。まて。山の麓に殿作とありしものこす。

或云松の下に小社華表あり。傍に有別當寺云。松房毎六月晦日よに於都の系宿多し。松の林くしく。唐崎大明神と云類も。堀田上野守所執有と掛るしく。今朝古事因縁云唐崎のつ

松一株とつものしく。松と。松のふも。一をふり仍得。一松名。佐々木日記云辛崎の松い元龜

年中兵乱よのり。松多り。天正十七年三月佐々木官領義弼山門を勤守ふして。一校も不伐松を。ぬあくと唐崎の洲。松と多くつとて植はふ。

松の下に別當明神乃社を建立し。後小松卿一保ふ

「千代少子兵幸崎の二川松樹。我方のまうりうも

尊朝法親王幸崎松の記云。小新庄駿河守

直頼の太深の松塚部とあり。松ふ。そのしく

よ松菴。東云。雑祿。直常とて二人のり。このかき

のしく。らんしく。ねりり。わ。彼松のふ。ま

るしく。牙の敷。毎つで載。ま。と。家中の者。ま

いひく。風情ある松とあり。わ。よ。か。う。ド。て

かり求て。植らん。め。う。り。よ。埒。ひ。い。う。ま。あ。も

ま。ふ。く。く。伝。来。の。人。め。と。う。め。ぬ。千。耐。天

正十九年辛卯の年秋乃素人もぬことりうい
一。皆後一くろきか中よあ

一かのおろくもあ一りう橋のたひくろく
已上右あまのりま秋是なるあぬ一

▲花堂の里ともあく秋と吹

あくさるしつあく秋と吹はつひうけり。
花堂の里はあうの心細よきし。

或云花堂は青く天智天皇大母の宮の北に
あまよ花堂梅橋とく。此とありあをくく
遊覧の地と云はる。是をありの花堂とく
袖中秋と志笑の花堂とく。辛酉院僧心

集よへ。巻秋の花りのありしつとく

○さく流るまうの花りのあふ若人の人のくせし
後約成神

▲桂カウラの実ミのりミとみミのりミ

李嶠一夜百詠月詩曰桂生三五夕カウラ賞開二八時ミ

とみミ十ミ五ミ夜とく。珊瑚も八月十ミ五ミ夜とみミ

生ルく。其生ルどるを桂とく。月終よ傷く実

のりミとく。謝靈運南樓中暹客詩日期在三五

夕善註曰三五謂十五日ミ

礼記日月者三五而盈也ミ

▲三五夜中新月色二千里外故人心

此詩ハ在白氏文集十四樂天八月十ミ五ミ夜乃曉

樓中一々交え慎うるをさひおしと。世ゆを
ゆる。新月とい八月十日夜のゆくゆく。さ
と。句い今宵の月いえん。ささく。高きとあり
の修より。下句よ二千里。卯といのえ。情が
ある不遠よをさく。ささく。故人と朋友
のゆとえ。今宵の月いふつさ。さ。さ。さ
朋友のふ。さひおしと。世さる。

▲あのをふてる月ささく。ささく。ささく。

拾遺集秋部源順あし。下句い今宵ぞ秋の
ゆらゆらり。洞玄云屏風は八月十日夜に
あま人あをいささく。ささく。

鏡の若き。とみうりと里もさる。ささく。

いつ。昔。大智天皇と。大友の命みと。我いの

時。鏡の太君討死と。則。此。別。よ。葬。あ。ふ。名。鏡

ふ。日本紀。ささく。の鏡とい。神代卷云。以。左右

手持。白銅鏡。兵。神明とい。壺。夜。不。多。の。さ。さ。く。

さ。さ。く。あ。さ。さ。く。さ。さ。く。の中。畧。し。口。変。云。神。盧。

如。明。鏡。之。照。万。物。矣。さ。さ。く。の。鏡。し。い。さ。さ。く。よ。

さ。さ。く。さ。さ。く。

新。後。撰

。田。山。い。月。も。さ。さ。く。の。鏡。と。多。よ。ゆ。り。ゆ。り。さ。さ。く。さ。さ。く。夜。中。に

▲山田やげせの後一船乃夜はうりふらり。九月のさ

つかのつら。あも。さ。さ。く。さ。さ。く。の。鏡。あ。い。さ。さ。く。さ。さ。く。

ふ回交稿のふとらじ葉はの向し意多し
板橋集之月の夜毎と云む傳よ昔いとに乃
湖ありよ舟ありて後海なるりしが舟のそ
こし来ゆと尋ねるふ志賀の志よ月しと
遊女もたりふとやましりたるがある秋の
ちしめつしとありし火をさむけりく花にせ
うしらすめてあけたるおよしづくたなぐり
たる男水子よまゑりしとて意くかのめ
るもゆしてとつとありしとるはれおつけ
よえしゆめありし空くたさの女房もじ録
つぎもくしと人の世ありよい催あ
かいとくえんあしとてあひたれあひさ
つとくしとひれい女もふありて
の田ありしと録の情乃花よりたり
世人もさへりしと乃れを清くはれその
年もさへりしと乃る二月すふもなりぬか
あふと因し矢橋のあふ敷る年とゆ
橋ありふの守護より世なを切くあは遠
り湖ありのうしとせむと人共一同は
しとて昔日を待経よ改よあそとて定め
しとるを後よ月しとて人の心とる
しとるしとるしとるくゆりたり人

夜更くとあり。涙を流しとつらやう。今の世を
色つと。我の心は思ふ事なる極あり。此男は
終りを法ひく。女身のみいとやうなるは。
生死を常のうすといふ事あるものうんじ。
我と女は終りて。女不あそとさうんじ。
一。浮世の形見よ男とて人腹内よのこ
ぢりなくいふ女は終りて。ふる人ありといひ
うさ。うさ。おそあつたふお茶所。此男を
若とせ、其のち後より一。終り。女を自中
うよとせんといひ終り。お時人々終りて。い
もん時。此男はじうふよと終りて。庭を
くへー。お時女へん女く走り。さもあいら
此男と若がり来い。女の後とさうりりあるとて。
けととてとくよ。若より。かくて。くも
彼極末とて。切より。女房は月とらと産
の奴とてとて。玉のくく。か男ととらみ
を終り。女とてとらねい。ち後と知人
そのせんとして。此女をとり。たを
くく。大さうとて。さう。さう。詔宮のどが
る。わらう。うさ。駿の傷とらと。終り
と。んた。勤くべうも。女。あ。人。と。あ。ら。と
わ。ら。あ。ふ。月。出。て。り。や。う。此。若。と。此。女。の。ち。後。

くへー。お時女へん女く走り。さもあいら
此男と若がり来い。女の後とさうりりあるとて。
けととてとくよ。若より。かくて。くも
彼極末とて。切より。女房は月とらと産
の奴とてとて。玉のくく。か男ととらみ
を終り。女とてとらねい。ち後と知人
そのせんとして。此女をとり。たを
くく。大さうとて。さう。さう。詔宮のどが
る。わらう。うさ。駿の傷とらと。終り
と。んた。勤くべうも。女。あ。人。と。あ。ら。と
わ。ら。あ。ふ。月。出。て。り。や。う。此。若。と。此。女。の。ち。後。

ありはつて。舟をい日中。小後梅さるんし。P. 3. 9.
 人々まゝとく。かゝるのP. 3. 9. ひととて。字はふよ。初
 次、P. 3. 9. とつら。さるん希代キダイのふぞとて。此
 事。ち後の子小く人々を驚らしとるは。とて
 月。よす。終り。を。るん。此。舟。を。つ。む。の。り。々。を。知
 る。り。よ。く。ま。り。り。り。れ。め。さ。る。色。さ。る。ふ。よ
 かり。い。い。回。矢。を。り。の。後。舟。の。裏。る。り。う。う。人
 る。く。た。月。の。さ。る。り。か。の。つ。う。う。舟。も。こ。う。れ
 お。く。人。と。い。い。三。井。寺。あ。も。も。休。む。り。と。ま。す。小
 希。有。り。ゆ。り。ゆ。り。ゆ。り。と。ま。す。と。ま。す。と。ま。す。

▲ありら乃撞の音やる

釈名曰鐘空也空内受氣多故声大矣

白虎通曰鐘之為言動也陰氣用事万物動成矣

五經通義曰鐘秋分之音也矣 爾雅曰大鐘謂之

鏞其中謂之剽小者謂之棧矣 山海經曰炎帝孫

伯岐鼓之飾之鐘也又伯岐鼓也とうりり

此人始之鐘也後世タクニ小黃帝の工人シカ倮作

鐘周礼曰鬼氏作鐘呂氏春秋曰黃帝伶倫曰余

ト十二鐘と備エラてしひヒとくク 巳上丈畧

鐘身等乃鐘とすなり多は皮剽ト

清見をハ駿河く寺ハ南向く山頂ス号巨鼈山カウゼ求王

院禪院也當寺ハ聖一國師之弟子関聖法師ケンセイ関基

也。近世為妙心寺派也。一 流見古の流の本堂のあ

しあり

千首。流見古流の流も多し。今く遠くあり入おるなり。為尹

三井寺の古も流の流も多し。今く遠くあり入おるなり。為尹

之ハ新撰分松ノ定家ノ事ニ 神社考云文保二

年三井寺回祿山徒取鐘不鳴衆人以多力撞之其

音如蒲牢之吼山徒惡之轉在動寺岩下碎破斤敢

聚拾而遣三井寺一日小蛇來拳尾敲之經宿鐘如

故在現矣 或云三井寺之鐘文保の比不鳴其後

久矣鳴るるが又文保久のよ此流鳴やじとく

此等の流ふりやしてじうふ之るを多へてく

しある歟

▲滅や此流ハ秀卿とや流の龍宮よりぬくとゆひ流は

帝王編年記云下野押領使秀卿奥名大呂五代孫

下野権太兼村雄子武藏守從四位下号田原藤太

世傳秀卿ハ朱菴院の比乃人。秀卿系圖云

住近江国依庄以故号依藤太矣 或ハ龍宮より依

と取ありありと云 依藤太と云 三井寺の流乃

り二流あり。延喜の比考ハ龍宮の流の流の流

と云の流と村殺を竜神修く考つと龍宮よつと云

も恩詔よ流下つ後一の功令十後の室地と云

此の流記よ流と

三井寺

載江談昔粟津冠者云者江州粟津建廣江寺佛殿
諸堂雖成就在鈎鐘欲鑄之為求鐵往出雲架西海
之船惡風吹而欲舟覆忽小童乘小船來謂冠者云
移是船我是小龍王也汝使見竜宮舟人莫恐風波
之難倚舟可待我言已將冠者去童子云我眷屬為
大竜多被食畢汝知精兵敵可此來為我可亡之無裡
來冠者帶弓箭射殺彼大蛇小竜悦曰以何報之冠
者云我願得鈎鐘小竜則与鐘積送小船來元之大
船邊冠者歸粟津鈎彼鐘廣江寺移星霜寺破壞住
僧一人于時鎮守府將軍清衡以黄金百兩買取之
寄討三井寺其比三井寺与叡山不快之時也廣江

寺山之末寺賣鐘三井寺本意仍山起廣江寺僧
沉湖水 已上文畧

▲龍女成佛 海人よ泣を

▲夜庚公が構よ登一も月小泳び一後の青也

庚公晋庚亮也字云元規秋の夜月よ素一くむ
樓よ登く月ををせりしゆとて。但月よ泳び
後のもと云るハハもとてあしはとくぬ

和漢朗詠集謝觀白賦曰曉入梁王之苑雪滿群山
夜登庚公之樓月明千里 晋書曰庚亮鎮武昌
諸佐吏殷浩之徒乘月登南樓惟飲不覺亮至將起
避之亮曰諸君且住老子於此興亦不淺遂據胡床

三井寺

与浩等談詠 矣

▲有詩云云。固々として海嶠と難き漸々として
衢と出此後句々くしる。明月よ向くをさすま
い。今宵一悔。滿清光何處のふらなり。人此句
をさすふけくわさりの情。さふれさる。橋よ登
て降とろく。 固々、月系とく兒也。 説文曰團圓

也 矣。 廣韻曰圓也 矣。 增韻曰聚也 矣。

海嶠ハ説文曰嶠山銳而高也 矣。 增韻曰山道 矣。

漸々ハ廣韻曰進也 矣。 咸韻曰流韻 矣。 雲衢ハ

爾雅註曰衢交道四出 矣。 一悔ハ月の名よつる初

堯山堂外紀曰李先主初有禪代意。忽夜半寺僧撞

鐘滿城皆驚。且將斬之。僧對曰。夜來偶得月。詩曰徐

々東海出。漸々上天衢。此夜一輪滿。清光何處。每先

主喜而釈之 矣。 江隣幾雜誌曰南唐一詩僧賦中

秋月詩云。此夜一輪滿。至来秋得下句云。清光何處

每喜躍。半夜起。撞寺鐘。城人尽驚。李後主擒而訊之。

且道其事得釈 矣。 信よ此の如く。夕文といふ矣。

人か。い。う。よ。と。の。め。ふ。そ。い。詩。狂。と。言。ふ。は。従。乃。聖

人か。い。う。よ。と。の。め。ふ。そ。い。詩。狂。と。言。ふ。は。従。乃。聖

此詩を修り。悦び踊る心程。一。才。夜。よ。釈。く

寺。乃。降。と。ろ。く。く。響。る。と。捕。之。飛。で。ん。と。志。け

も。た。詩。の。境。は。修。く。ゆ。ら。ら。く。ゆ。を。始。り。

詩狂といゆる人のおぼしきまをこ。聖人といふ二十六
人の約聖の教をうけくつる歎。此聖人とい
侍人と称すは下る約しるなり

▲煩悩乃多をえんとる法のなまも静ふ

止観五曰三夢中眠夢辟夢譬並明煩惱未眠譬法

性^二多と煩悩よたつる多き流り累之

▲初夜後夜晨朝入達 是の五夜六時の内中夜と

日中とを畧して初の時と云ふ。初夜は成

乃別後夜は寅の時。晨朝は初夜あけく入る

の月没^{モウ}。昼夜の静の音と。此句の偈よ空しく

と云ふの湯谷よ流と

▲是の初夜の静をつく内の中畧月も教むひく百八煩

悩の眠りの 六時の静をつく小世法よ申す

日中とを畧して初の時と云ふ。初夜の静

つる月も教むひくは百八の教よ合する

と云ふふ二教よ一教よの初夜の静は七つ

と云ふと十の初夜は六つ入るも十と云ふと十

と云ふと日中八つ中夜も九つと云ふ二九十八と云

は句の偈と云ふと今宵八月満月と云ふ月も

教むひくは十と云ふと初夜は百八と云ふと又

一教よの五夜十二時と云ふと初夜の教と云

と千とゆけて一百八と都合するこ

▲諸行無常是生滅法生滅々已寂滅為樂

是ハ零心ヒツゼンの半偈ハンゲの文也 涅槃經曰我於過去身

為童子於雪山修行求道時聞羅刹於大林中宣說

半偈我當詣彼作如是言善哉聖者何処得此半如

意珠乃至為我宣說四句云諸行無常是生滅法生

滅々已寂滅為樂我以身施羅刹如故現帝釈形矣

此四句偈の意ハ此娑婆の依託ハ生住異滅一ハ心

體ハ生老病死とらるる小諸の無常と云ふ也此ハ

ある者ハ皆滅とらるる小是生滅法と云ふ生滅も滅

て後ハ寂滅と云ふ無常と云ふ樂とす此ハ云と寂

滅者樂といふこ

。考ふるに世より少果の消ぬるけ小多と捨るものこ

▲菩提の乃乃淨のなる 名義集曰摩訶師云道之極者稱

曰菩提後代諸師皆訣為道大論翻為佛道一矣

菩提の乃乃淨の源氏供養にも記と

▲百八煩惱の眠の 四教義集註曰眼耳鼻舌身意六

根對色声香味觸法六塵各有好惡平三種不同則

成十八煩惱又六根對六塵好惡平三種起苦受樂

受不苦不樂受三種復成十八煩惱共成三十六種

更約過去未來現在三世各有三十六種總成一

百八煩惱也矣 大徳見惑八十八使思惑の十使

三行

十九

十纏の悪と。とつひ令く百八煩惱と云ふ

▲小陸のまゝ梅枝よはると。去如乃月いふ姑よはると

▲更長樂の鐘乃もまいたのゆふつとぬ又竜池の柳乃

色いぬの中小深一

朗詠集云李嬌詩長樂鐘声花外尽龍池柳色雨中

深美 侍の意い長承乃清阿ふあつひくそとら

まををそくひくそくむの本小長。竜池の柳を

ぬ小深くもて。色らりりく足りともり。長樂の

漢高祖の建徳る宮の多と。史記よんくつり。

龍池い武陵記云謝朓為武陵郡守時有黃龍見於

郡東水中拜表上賀曰号龍池一矣

▲外書いも代々の人河乃林のう移くそく

そかちああもとくくみ流を。安あもと云附い。あふ

りろく一の侍をひいれい。流よ日本をひいあんと

安ありそと。又たあありそと附い。侍くあくと

對くくく。河の林いあこ 古今真字序云夫

和歌者託其根於心地發其花於詞林者也矣

文選表曰塞中葉之詞林酌前脩之筆海一矣

。集ああ納の林あもせくふまらじとつ浦松 法皇御製

れと或は林の流い六月の異あこそとひうけ

らりそとひうけ。ゆくそと。ゆと光林のう

ゆくそとつらりい。流の流あ六月の異あを

大正寺の隣に海雲の後カスミケ蓮池の側カスミケあり。此後
を常院の種と号し。言野山系傳之記云藤原三條
あり。此後蓮池寺の隣とてふもよまます。とて思
のつうれとていふなり。と。紙カスミケ巴カスミケをとりたり。
いふといふと。漸カスミケ愧カスミケのありひとるせり。

△山寺のまの夕暮とて入れたるの隣は蓮池を教なり。
新古今集も、新小徳周法師云。 洞と云ふ里小

よりりとくしとゆりたりとく。一草小とのぬえまふ
里のとく。 東野列云入おの隣小むの教一とていふ。
入おのるりは小むを教なりとのふあり。とていふ。

増世云山里のまの夕暮は、いふなりとのとていふとて
きへ別のゆりなり。とて入お乃う移よむのちりなり
る。と。此、あはれコリたコリのうへの令コリ絶コリ寺コリとていふ。
とて。令絶寺のつとていふのまのりのゆふ。揚馬を極
て。まのりのあはれなり。とて入お乃う移をつとて
花の散らゆとていふ。ゆふとていふのこころとていふ。
味背ハ言ゆははと。衣くハ千巻ははと。

△侍育よ交りゆ縁のまのけのありぬ別とのるに相
新古今集も、と小徳法師云。ふの別色のるに相
とて相らふとていふ。侍育小交り侍育のゆへに相らふと
へとていふ。相らふとていふ。相らふとていふ。相らふとていふ。

なり。母の爲に於ての内内小大迄の局とて。P. 11. 文畧 通念集云小竹渡返よの筑後守と妻郡司 黒木の仙某よ嫁をこそとて 今物語云世に花人の 内裏の六位をくへく。やうー花人といふれたるあ りりり。世大細云も後徳大寺大長の内記 今小徳大寺及家老不相りしを名のりこ今の家 老と相ふの紀存とて

又ハ考くくの秘さめりり。 通材集云老らくハ 只老こらくハ垂字こさく。 只をみくくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。

○老らくの秘さめりり。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。 意ありと意くくとつ。

三體詩云月落烏啼霜滿天江楓渙火對愁眠姑蘇 城外寒山寺夜半鐘聲到客船 是ハ張繼楓橋 夜泊と云歌くく絶句。言ハ張繼と云者楓 橋と云取らむく夜泊々々。月落烏も鳴。お天小 流る時。江楓の渙火と云くかー眠々々。姑蘇城 外の寒山寺の滝乃多。客の素々々。舟々々。 して云々。此詩小鳥啼とありと。信よいら啼 てしとて。是ハ錦橋候へ張繼再ハ楓橋と云

得ふも常月落客山寺くはる。此のゆとく及小れ
合化りしりく。大明一統志ハ云蘇列府楓
橋在府城西七里。面山臨水可以遊息矣
又云蘇列府姑蘇山在府城西四十里。姑蘇臺在其
上矣。亦云蘇列府寒山寺在府城西一十里矣。

蓬窓の窓乃船の窓也。
草根集よ沈函滴蓬といふ歌よく

是ハ駿河、玉清尼が関の者よくい
旧事本紀云珠流河国造志賀高穴穗朝世以物
部連祖太新川命兒片堅石命定賜国造矣

本和事紀云駿河國ハ昔ハ泥流河と云。其故ハ
葛波河の湊よ漂沼あり。彼沼随波打。此方
彼方へ行く。ゆると駿河と云。其河よと云
よ駿の字と付也。島士乃南海よゆれ浮んど、
多地不定。時浪の打よせく。此よ玉掛け。仍
およむる駿河其号と云く。流尼が関ハ浪の関也
云。後く方集よ流の関と云。ありハ山面ハ海ハ
関ハ流尼寺の門を云。更級記云流尼が関ハ序
つこへ海あり。関屋もあまきりく。海ヤそ
くごわと云く。万葉伝是抄云浪の関
ちとく。此ハ流尼が関と云。今へく。今へく。

かんやスラの海の塩をらて流るるも...
とせりあくりりるれ。流のるも...
とせりて波をうきくも...
江府紀行云小堀遠江流見が...
ぬすふ登りくも...
とつか山見小吟...
せらる廣長言ふ...
勢小るのねる...
の小舟ハ浪る小舟く...
下畧

將軍東夷征伐の時高丸強兵流見...
攻登ると

丙辰紀行之延曆の...
河玉...
亦破く...
つこく...
或人云流見...
冥の四趾...
今小流見...
わく...
こわめ...
三井寺

玉葛

或云玉蔓其蔓引地葉似忍冬葉而厚春開小花色青緑可愛

玉葛といは源氏の妻乃名く源氏の妻乃名ふ

「玉葛の方ハ玉蔓といふ玉蔓といふ名を記す人

河海抄云以此哥為卷名云云

玉葛の内侍ハ後仕の大后中ねつひ一時夕敷の上小
かよひ給ひて玉蔓給ひ一由ふく内侍と兼の時母ハ
河原院ゆく果給ひ一も夕敷を小足より。玉蔓小
か給ふ時めのかつつかの記書小下り小中
ねく夕敷の上終の後るまの。那小給一玉蔓

玉葛

是亦わくそく^シりた^ルハ姫君と具^ス一^ツツ筑紫小下也。
十歳^ノ比^ニ似^シ果^シと^ク登^リり^テ小^シ少^ク戴^ス^ラキ^クが^レ色^ハ子^ニ三
人^ニり^テ小^シ幼^クとも^ハい^ハ。父^モ小^シち^シセ^リへ^テ一^ツ。念
以^テ遠^ク去^リ一^ツと^ハい^ハく^ハみ^レバ^ハ登^リり^テ終^ルる^ハも^ハ月
日^ハ不^レり^{。お}と^ナり^一く^ハ終^ルよ^つけ^くハ母^ヲ與^ルり
も^ハす^りて^うく^一り^り々^色ハ^{。筑}紫^ノの^女の^人せ^る
そ^こに^しり^くこ^おか^りり^り。申^ス小^シ父^ノ監^トて^肥後、
小^シい^きゆ^ひを^のま^り。三人^ノ子^共と^うく^一い^ハ。玉
着^とじ^う人^はい^ふを^おと^しる^小。次^節三^良ハ^女夫
乃^ハ監^小た^のま^り一^ツ。ち^節い^らり。父^ノ遠^クと^すり^り。
母^ハく^とひ^らか^く。疾^キげ^おく^終不^レり^{。お}小^シ
若^とり^しめ^て後^に是^也。ま^りと^りた^は後^君も^色ハ^{。小}方
乃^ハ兼^とい^のへ^きお^小玉^着と^なり^い。初^節へ^さふ^で若
と^うり^てや^とま^せら^る小^{。夕}良^のめ^のと^右と^いひ^一い^ハ。
夕^良も^くか^終ひ^と後^{。源}氏^の小^方小^玉ま^り一^ツ。玉^着
の^末の^末と^を終^へと^{して}。是^も初^節へ^さふ^どゆ^りと^そ
同^ト一^ツ。小^玉と^まり^めり^あひ^とた^不終^へり^り。右^とハ^{。源}氏^の小^方小^玉の^あひ^一。ゆ^りと^終
行^く二^系院^へむ^く終^ひ其^節の^一と^り乃^ハ町^小終^せ
終^ひ。東^の小^とと^あく^一ら^不り^一。垂^終ひ^{。後}小^ひ
げ^らの^大乃^ハ終^とる^まり^{。委}小^玉着^と終^ふら^り

▲是ハ信^公一^人の^傷あ^くい^我此^終ハ^あ終^よい^ひて

玉^着

二

傳ハ田村小波也。南朝ハ奈良の都也

今の小波小波して南朝と云ふ。元明天皇より桓武

天皇より七代奈良小波して今今の所小波也。奥

福寺の西二条村小波昔の都乃此方八町あり。田圃の家

小九条の名抄より内裏の跡は松あり今も田と作す

保安百首

○望さくらの都の跡とていふと人のこゝろ形足あり。源仲正

詞林采葉抄云慶雲四年六月十七日文武天皇於

藤原宮崩同七月十三日母后元明天皇即位同五

年五月改元為和銅同二年始建那羅都同三年遷

都至桓武天皇延暦二年八代居平城宮同三年遷

山城国綴喜長置同十三年遷平安城然者自藤原

宮遷都以來皇居是七代者也

大和本記云持統文武二代ハ藤原の宮小波給元明

元正聖武孝謙廢帝稱徳光仁七代ハ奈良小波給上

私云奈良の都ハ或ハ十代或ハ九代迄ハ同也。但七代の

況用之歟

△靈佛冥社

此乃小波奈良小波無限社武天皇より此

社ハ四社あり。修々社社佛名は旧跡ホ多

△又是より初瀬より少くも志て

長谷寺在和列城上郡号豊山神樂院長谷寺

帝王編年記云神龜四年丁卯三月廿日長谷寺供

養行其菩薩為導師此寺者二丈六尺十一面觀音

像也奉立石上御衣木楠木也此木者洪水之時自
 近江国高嶋郡三尾山前流出也林间之民以其木
 用薪之葦悉以亡失又疫病盛也卜筮其处此木之
 崇也仍引彙大津边旒於彼取如此常成雷響時人
 号霹靂亦諸人不安堵又引彙長谷川边畢德道上
 人因此真存靈木之由奏申天皇即宛贈稅稻三千
 束造此像畢德道者備磨国人也母逝去之後偏流
 浪山林遂止住大扣国城上郡長谷山夢中靈神忽
 現曰此峯地底有盤石本自以来不顯宜可顯德道
 悦不諾入于時雷響水流見其跡縱廣正等方八尺
 石其面如掌德道悦奉立此石上古老傳云南閻浮
 提地底有盤石枝分三方一者摩伽陀国之中心金
 剛座也三世諸佛如来此石成正覺一者指南海禰
 陀落山也指東一枝此觀音座也本自有菩薩之行
 定跡如彫奉立此像寸法相叶益相違々々

↑の書の多小お小宮のちりり

右今集雜下云貞観の時万葉集ハソレセリ
 ちりりと云せ抄ひりれハソレセリ。文尾有季
 月内西館と云るハの書乃多小お小宮のちりり
 万葉集ハ平城天皇の時撰定るハ世小流布
 万葉集乃多小お小宮ハ平城帝と云々。ちりりハ
 万葉集と云る。多小お小宮ハソレセリ

▲^{カミテラ}後上寺 井筒日記と

▲法の子や之痛の杖山本切チバチ経もろく

○^{後拾}杖村トいトくト平トもトうトりトらトんトもトあトぬトと痛の山本

▲舟の泊りやまのせ川 山を泊瀬たせ也小舟の泊りや

といつたり。妻く世次日記と

▲舟人もいせをきふと大治のうらうり

此方のあうなをてすゆらく。此方の玉為の志筑紫より

のりりゆふ時大宰女貳の娘ありく云女舟の内少く

い〜い〜

玉為きふあり。方のうらあをいへる物と舟人の

舟のあいをとく。大治の筑紫志カキ建カキの志カキ建カキの志カキ建カキ 岷江

入楚

▲著てゆく秋乃洞村時

○光明峯寺撰政治家合 秋のま〜い〜衣ての秋乃洞や時ぬか〜人 成実

▲みなら掉 魚平小治と

▲新石 船の楫とたえ

○由良のこを修る舟人挽をたけり来もあぬ魚の乃が 好忠

▲名小流ささる 橋川日記と

▲あま小舟泊瀬の川と〜みおろる

海士小舟泊瀬とつけらるち多〜。万もふはえ抜と

海士小舟泊瀬と川と〜いぬ玉よ小舟 謂之波都依テ

而海士小舟泊瀬といつらる。或い又泊瀬の泊の字ハ

とまろるともあ。舟の泊りの洞あ〜。海士小舟泊瀬

とつらるかへーさく

万。あま小松御殿の中流のりかきく島、まゝまゝ

▲又其勢ひもろこ小舟、まゝこゝのあまのまゝ

▲月影も白ふ、右辺小記と

▲真如流をさるの戸小、こゝりくの御殿をいひく、御

漱い岩流をいへ、三井寺小記と

▲かくて清きよありつ、補陀洛ふもまのあり

補陀洛ふの観音の流を、長谷寺と補陀洛ふと

りら、此、義寄処あり、りも此と、右の帝王編記

其、意具小なり、り

名義集云補陀洛山、梵語曰補陀落伽、或云補陀洛

迦、此云海嶋、又云小白華、矣

西域記云、秣刺耶山、東有布咀洛迦山、山頂有池、其

水澄鏡、派出大河、周流繞山、二十雨、入南海、池側有

石、天宮、觀自在菩薩、往來遊舎、矣

周應賓普陀山志卷二、曰補陀洛伽山、在昌國東海

中、今屬定海縣、矣、佛祖統紀五十四、曰補陀山、唐

宣宗、此山在大海中、去鄞城東南水道六百里、矣

大悲經曰、所謂補陀落迦山、觀世音宮殿、矣

▲三本の枝乃まことと、あはれ、い、た川、野、さ、ふ、ま、と、ま、り、

玉、首、ま、ま、よ、玉、首、の、あ、ふ、あ、さ、め、ら、り、あ、ひ、て、ま、あ、る、ま、

。和歌川、た、川、か、へ、よ、二、本、ま、枝、ま、ま、と、へ、く、ま、も、ま、ま、ま、二、本、ま、枝、

ま、ま、

河海抄云此方を記くありき。三光院清流云は
初瀬小玉と云く作らざり。何ぞと云きまらば
私云玉尊ハ元來ハ中納の子也。源氏、天皇とあり
とありと云く、敏子小玉一並に、後ハ此方の二本
の抄ハ中納と源氏の系とありの事とあり

▲光源氏 葵と小玉と

▲玉尊の内侍 内侍の事玉尊とあり。以て
の末よりを述法ありと云。次の紫乃後瑞小尚侍の
抄ハ宮仕の事と云あり

今、義解云内侍司尚侍二人、典侍四人、掌侍四人、
百寮訓要抄云尚侍ハ執柄の女メと云く、小メ、女メ

更衣同経の事、近代ハ此女小メと云く、典侍ハ
大中納言の女メと云く、小メ、紅葉の織物の紫と云く
と云く、上臈女房ハ、掌侍ハ云々、上人法衣の女と
是ハ小任せり、才一の内侍と云當と云く

▲右近しと女小玉と

右近しと女ハ、夕顔の君の事と云く、夕良果メと云く、
源氏の事ハ小玉と云く、徳の本又少と云く

▲代々乃嘉の事乃消ハ、跡ハ中メと云く、小メ、
帚木、小玉、夕良の上メ、中將ハ、小メ、

山後メの事ハ、折メと云く、小メ、
此方より玉尊の事と云く、時の事と云く

玉尊と夕娘の秋夜とていふこと

△^古 伝りの本乃るの月

。あるまうりりる月の影をいふこと

此、河古あふ流を

△ 伝まわりつる人乃あつま流内さへ

肥後のちま乃監とて著たけとて男なるが玉尊よん

とりけしとてつるよふに

△ 伝とつる河小のつとる

玉尊あつたの月。花も深情とてあつた艦と多く

と。あつたのつとるつとるつとるつとるつとる

つとるつとるつとるつとるつとるつとる

つとるつとるつとるつとるつとる

つとるつとるつとるつとるつとる

つとるつとるつとるつとるつとる

つとるつとるつとるつとるつとる

つとるつとるつとるつとるつとる

△ 伝浦唐士船とていふこと

。浦唐士船とていふこと

△ 伝浦唐士船とていふこと

玉尊あつたのつとるつとるつとる

と。あつたのつとるつとるつとる

と。あつたのつとるつとるつとる

ふみーふん。是ホ大宰の女戴がみく。祇江入楚を浮
流ハ駿河の名はるきた。此方ふてい名はふあしに
只らさむおこし新造て。越々まもてもちまらる
あしむしこし

或云肥前五浦山の坤乃藤よ後実りの具十町斗
知小大河ありあふり山小流。名は浦川。其色を
浮流さく

▲ひびきの瀬もよそく 玉首、あそひまの瀬もあそく
うふすまこしきく 玉首筑紫を山けおたひー小次
うらまやまら舟あそひかの監が越あらゆく。あそきて
よあの方ふ

同書小狗のこころくヒシキ 雲よひびきの瀬もよそく
同書小つり。去秋のつた玉首のつた。古本流くも。
祇江入楚小玉首のつたゆらふく

三光院流をひびきの瀬ハ海茶團小つりき。
万葉ふよひらこの瀬くあり。袖中枚をひらふの瀬。
據广小あり。俗流よひびきの瀬たさく

或云響洋筑前海中道鐘水崎等北海也相傳一
丈許鐘沉下海底有之故名鐘水崎因其近チカ边ヘ称響
洋矣

▲かくて秋の中とくもあは浮うの舟の内 同書小玉首のつ
かたもあはぬ流舟あそひて風ふ浮うる方とほされ

張江云は方書葛の男乃とふよそくを著し。か末と
てもは彼小すをせらるめりとも

▲從やうといふもあまの法各ふまごらる地といふもあまの
の法と 同書云は表部小登り。九条小富とあり。後法
々色と部の内といふ。まろくーと人の法といふ
あまあこも。あまーといふ高人の中あま。いぶせ
世中とあいつ秋も成りまこふといふ。いふま
あまといふあかうり。あまのふと云たのり一人も
あまの法よまごらる地といふ。いふあまといふ
法の。いふあまといふと

あまの法よまごらる地といふ。まごらる地といふ。元院乃
復あまといふとあまといふ。まごらる地といふ。まごらる地といふ。
まごらる地といふ。まごらる地といふ。まごらる地といふ。
まごらる地といふ。まごらる地といふ。まごらる地といふ。
まごらる地といふ。まごらる地といふ。まごらる地といふ。
まごらる地といふ。まごらる地といふ。まごらる地といふ。
まごらる地といふ。まごらる地といふ。まごらる地といふ。
まごらる地といふ。まごらる地といふ。まごらる地といふ。
まごらる地といふ。まごらる地といふ。まごらる地といふ。

▲是川の大和落や唐土ともあまの地乃法麻のこまわじ小鼻
是川の檜垣小はも。大和の田村小はも
あまの地といふ。あまの地といふ。あまの地といふ。
あまの地といふ。あまの地といふ。あまの地といふ。
あまの地といふ。あまの地といふ。あまの地といふ。
あまの地といふ。あまの地といふ。あまの地といふ。
あまの地といふ。あまの地といふ。あまの地といふ。
あまの地といふ。あまの地といふ。あまの地といふ。
あまの地といふ。あまの地といふ。あまの地といふ。

後拾遺小和泉赤坂のうらひ小まゝありあり

「物心はの量るあまのあこりれあまがたてなる

▲号小乳きつら強きうらや飛うら 是ハ言説の良玉着入

あつりしむひとあまのありは後西の舞入のころけひし時

源氏の表あらし衣乃紗小巻とまきつとま巻のまきまはけんキチホウ

あびて巻とまあらうひとのまらまきま巻とませとま

らんシはひしき巻の巻小巻しは菴和尚此らとあり

「司一人のまやまひのま巻巻とまらまひの巻執

▲此巻執とひらまのま巻のま巻 巻執とひらまらまらまらまらまら

あり物とま巻のまきつらまらまらまらまらまら 新撰朗詠集云

以言詩真如珠上塵チキイヒ厭イヒ礼イヒ忍辱イヒ衣中イヒ石イヒ結イヒ縁イヒ矣

櫻河

櫻河ハ常陸國筑波山より流る末に櫻川と名をい

井陸抄と古方枕小櫻川ハ常陸とく

古昔百人一首抄とまの川乃末ハ櫻川とあり

但常陸の人小とくハあとを櫻川とく

つら此小とのと小の練乃ま居あり櫻の本多し依而

名づくし

今案万葉集才十六巻小櫻サクラゴ兜と名あり此徳よま櫻

子がよま櫻と名ふつ小櫻子ハ本花コノハナ咲サクラ耶ヤ娘メの氏ウヂ子コな

ま櫻子と名付しつらこれ徳の他者の女あり

▲櫻小ひ者ハ東四方の人高人よま我久後抄ふひし

都の字義いささ小記也

▲此交ハ筑紫日向小倉下りてい

国造本紀云筑志国造志賀高穴穗朝御世阿倍臣
同祖大彥命五世孫田道命定賜国造_矣

日本紀纂疏云筑紫洲者地之形似木免和名曰都
久俗謂耳附之鳥也_矣 旧事紀云謂筑紫嶋身一

而面四每面有名筑紫國謂白日別豊國謂豊日別
肥國謂速日別日向國謂豊久士比泥別後世復分

▲此文と力の代々を採のる場のあはく
為九國即西海道也_矣 日向景清一はす

文ハ湯谷小倉と力の代々ハ力を賣一代物とも場の
るゆハ日向小見湯熱喉屋娘の神社の色よりり

▲此名々の名の戸の 布施屋と云ひとり休つりり此
あせやハ名のあせを賤のあせやと云神あへー。布施屋

の角田川小流と
。形と梅のありとを袖ふとあへくひとりあせとくひとりあせ

▲此も本は同耶娘 地神三代天津彦火瓊々杵尊后
也大山祇神之女磐長姫妹彦火々出見尊母也

神代卷云天津彦火瓊々杵尊天降日向之高千穗
峯自其到吾田長屋笠狭之碕時彼國有美人名曰

鹿葦津姫皇孫問此美人曰汝誰之女子耶對曰妾
是天神娶大山祇神所生兒也皇孫因而幸之即一

夜而有娠矣 一書云彼国有美人名曰鹿葦津姬

亦名神吾田津姬亦名木花之開耶姬矣

古事紀云名木花知流耶姬矣

瓊々持、も二人の女と名付ふ。姉の磐長姫ハ白醜也

ハ小免さす。妹の本、花開耶姫ハ形らりく則るて一

夜小く孕めり。姉の磐長姫大さ小慙て詔て云天孫

家と名付をさめり。い児の壽永く磐石のこころ小

ゆらん。今改小妹と名付。其生児必本花のこころりく

後為らんとす。 神代卷下

すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

玄旨固と云おひいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝ

櫻狩 石近小波と

▲是の常陸必強彦寺の住僧のい

磯辺寺、在常列真壁郡行基の用基。本さの八茶師加来

常陸国 国造本紀云新治国造志賀高穴穗朝御

世美都呂岐命兒比奈羅布命定賜国造矣

大和本紀云常陸国とい此必ハ塩さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

地ありき。帝此、ふと常陸地と名付。りて彼国を

常陸のふと宜。仍。其より後ハ塩をくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

也。故小常陸と名付。下畧 万葉仙史抄云常陸必

と云々 風土記云往来道路不_レ滿_二江海_一之津_三瀆_二郡_一
卿_{サカヒ}境_{サカヒ}塚_{サカヒ}相_{サカヒ}經_{サカヒ}山川_{サカヒ}之_{サカヒ}峯_{サカヒ}谷_{サカヒ}庄_{サカヒ}近_{サカヒ}通_{サカヒ}之_{サカヒ}義_{サカヒ}以_{サカヒ}即_{サカヒ}名_{サカヒ}称_{サカヒ}矣_{サカヒ}
こ_{サカヒ}ま_{サカヒ}ハ_{サカヒ}中_{サカヒ}道_{サカヒ}路_{サカヒ}不_{サカヒ}滿_{サカヒ}江_{サカヒ}海_{サカヒ}く_{サカヒ}が_{サカヒ}の_{サカヒ}ま_{サカヒ}ら_{サカヒ}あ_{サカヒ}ひ_{サカヒ}つ_{サカヒ}り_{サカヒ}
あ_{サカヒ}ひ_{サカヒ}ら_{サカヒ}と_{サカヒ}名_{サカヒ}つ_{サカヒ}く_{サカヒ}と_{サカヒ}名_{サカヒ}つ_{サカヒ}り_{サカヒ}又_{サカヒ}万_{サカヒ}葉_{サカヒ}ふ_{サカヒ}衣_{サカヒ}の_{サカヒ}
い_{サカヒ}ま_{サカヒ}と_{サカヒ}つ_{サカヒ}り_{サカヒ}る_{サカヒ}ハ_{サカヒ}倭_{サカヒ}武_{サカヒ}尊_{サカヒ}巡_{サカヒ}狩_{サカヒ}東_{サカヒ}夷_{サカヒ}之_{サカヒ}国_{サカヒ}幸_{サカヒ}過_{サカヒ}
新_{サカヒ}沼_{サカヒ}之_{サカヒ}縣_{サカヒ}取_{サカヒ}遣_{サカヒ}国_{サカヒ}造_{サカヒ}毘_{サカヒ}那_{サカヒ}良_{サカヒ}珠_{サカヒ}命_{サカヒ}新_{サカヒ}令_{サカヒ}堀_{サカヒ}井_{サカヒ}流_{サカヒ}泉_{サカヒ}淨_{サカヒ}
澄_{サカヒ}心_{サカヒ}有_{サカヒ}好_{サカヒ}愛_{サカヒ}時_{サカヒ}停_{サカヒ}衆_{サカヒ}與_{サカヒ}翫_{サカヒ}水_{サカヒ}洗_{サカヒ}手_{サカヒ}御_{サカヒ}衣_{サカヒ}之_{サカヒ}袖_{サカヒ}垂_{サカヒ}泉_{サカヒ}而_{サカヒ}
沾_{サカヒ}依_{サカヒ}漬_{サカヒ}袖_{サカヒ}之_{サカヒ}義_{サカヒ}以_{サカヒ}為_{サカヒ}此_{サカヒ}国_{サカヒ}之_{サカヒ}名_{サカヒ}矣_{サカヒ}

師_{サカヒ}弟_{サカヒ}の_{サカヒ}契_{サカヒ}約_{サカヒ}と_{サカヒ}る_{サカヒ}一_{サカヒ}尸_{サカヒ}て_{サカヒ}い_{サカヒ} 師_{サカヒ}通_{サカヒ}弟_{サカヒ}子_{サカヒ}の_{サカヒ}契_{サカヒ}約_{サカヒ}と_{サカヒ}師_{サカヒ}と_{サカヒ}
周_{サカヒ}礼_{サカヒ}曰_{サカヒ}為_{サカヒ}人_{サカヒ}之_{サカヒ}長_{サカヒ}訓_{サカヒ}物_{サカヒ}之_{サカヒ}規_{サカヒ}名_{サカヒ}師_{サカヒ}長_{サカヒ}矣_{サカヒ} 弟_{サカヒ}子_{サカヒ}遺_{サカヒ}教_{サカヒ}
經_{サカヒ}節_{サカヒ}要_{サカヒ}云_{サカヒ}学_{サカヒ}居_{サカヒ}師_{サカヒ}後_{サカヒ}改_{サカヒ}言_{サカヒ}弟_{サカヒ}解_{サカヒ}從_{サカヒ}師_{サカヒ}生_{サカヒ}故_{サカヒ}称_{サカヒ}子_{サカヒ}矣_{サカヒ}
と_{サカヒ}ま_{サカヒ}ら_{サカヒ}う_{サカヒ}も_{サカヒ}ま_{サカヒ}久_{サカヒ}く_{サカヒ}な_{サカヒ}り_{サカヒ}て_{サカヒ}や_{サカヒ}あ_{サカヒ}ま_{サカヒ}ら_{サカヒ}る_{サカヒ}あ_{サカヒ}ま_{サカヒ}ら_{サカヒ}ふ_{サカヒ}
と_{サカヒ}ま_{サカヒ}ら_{サカヒ}ふ_{サカヒ}

櫻將 石近小波

是_{サカヒ}ハ_{サカヒ}常_{サカヒ}陸_{サカヒ}必_{サカヒ}強_{サカヒ}色_{サカヒ}寺_{サカヒ}の_{サカヒ}住_{サカヒ}僧_{サカヒ}少_{サカヒ}く_{サカヒ}い_{サカヒ}
磯_{サカヒ}边_{サカヒ}寺_{サカヒ}在_{サカヒ}常_{サカヒ}列_{サカヒ}真_{サカヒ}壁_{サカヒ}郡_{サカヒ}行_{サカヒ}基_{サカヒ}の_{サカヒ}用_{サカヒ}基_{サカヒ}本_{サカヒ}ま_{サカヒ}ら_{サカヒ}ハ_{サカヒ}茶_{サカヒ}師_{サカヒ}加_{サカヒ}來_{サカヒ}心_{サカヒ}
常_{サカヒ}陸_{サカヒ}国_{サカヒ}ハ_{サカヒ}国_{サカヒ}造_{サカヒ}本_{サカヒ}紀_{サカヒ}云_{サカヒ}新_{サカヒ}治_{サカヒ}国_{サカヒ}造_{サカヒ}志_{サカヒ}賀_{サカヒ}高_{サカヒ}穴_{サカヒ}穗_{サカヒ}朝_{サカヒ}御_{サカヒ}
世_{サカヒ}美_{サカヒ}都_{サカヒ}呂_{サカヒ}岐_{サカヒ}命_{サカヒ}児_{サカヒ}比_{サカヒ}奈_{サカヒ}羅_{サカヒ}布_{サカヒ}命_{サカヒ}定_{サカヒ}賜_{サカヒ}国_{サカヒ}造_{サカヒ}矣_{サカヒ}
大_{サカヒ}和_{サカヒ}本_{サカヒ}紀_{サカヒ}云_{サカヒ}常_{サカヒ}陸_{サカヒ}国_{サカヒ}と_{サカヒ}ハ_{サカヒ}此_{サカヒ}ま_{サカヒ}ら_{サカヒ}地_{サカヒ}さ_{サカヒ}ハ_{サカヒ}滿_{サカヒ}く_{サカヒ}民_{サカヒ}の_{サカヒ}あ_{サカヒ}居_{サカヒ}
地_{サカヒ}あり_{サカヒ}と_{サカヒ}帝_{サカヒ}此_{サカヒ}ま_{サカヒ}ら_{サカヒ}と_{サカヒ}常_{サカヒ}陸_{サカヒ}地_{サカヒ}と_{サカヒ}ま_{サカヒ}ら_{サカヒ}り_{サカヒ}と_{サカヒ}て_{サカヒ}彼_{サカヒ}国_{サカヒ}と_{サカヒ}
常_{サカヒ}陸_{サカヒ}の_{サカヒ}心_{サカヒ}と_{サカヒ}室_{サカヒ}仍_{サカヒ}テ_{サカヒ}其_{サカヒ}ま_{サカヒ}ら_{サカヒ}後_{サカヒ}ハ_{サカヒ}地_{サカヒ}を_{サカヒ}く_{サカヒ}と_{サカヒ}り_{サカヒ}民_{サカヒ}安_{サカヒ}穩_{サカヒ}
也_{サカヒ}故_{サカヒ}小_{サカヒ}常_{サカヒ}陸_{サカヒ}と_{サカヒ}り_{サカヒ}下_{サカヒ}界_{サカヒ} 万_{サカヒ}葉_{サカヒ}ふ_{サカヒ}仙_{サカヒ}受_{サカヒ}杖_{サカヒ}云_{サカヒ}常_{サカヒ}陸_{サカヒ}小_{サカヒ}

と云々 風土紀云往来道路不_レ滿_二江海之津_一 濱_二郡
卿境_一 塚相_二經_一山川之峯_一 谷庄_一 近_二通_一之義以_レ即_二名称_一 矣
こま_一 中_二道路_一 不_レ滿_二江海_一 く_レの_一 くら_一 あ_一 ひ_一 づ_一 かり
あ_一 ひ_一 くら_一 し_一 名_一 つ_一 く_一 と_一 名_一 くら_一 又_一 万_一 葉_一 ふ_一 衣_一 の
ひ_一 くら_一 と_一 つ_一 くら_一 くら_一 倭_一 武_一 尊_一 巡_一 狩_一 東_一 夷_一 之_一 国_一 幸_一 過_一
新_一 沼_一 之_一 縣_一 取_一 遣_一 国_一 造_一 毘_一 那_一 良_一 珠_一 命_一 新_一 令_一 堀_一 井_一 流_一 泉_一 淨_一
澄_一 心_一 有_一 好_一 愛_一 時_一 停_一 衆_一 與_一 翫_一 水_一 洗_一 手_一 御_一 衣_一 之_一 袖_一 垂_一 泉_一 而_一
沾_一 依_一 清_一 袖_一 之_一 義_一 以_レ 爲_二 此_一 国_一 之_一 名_一 矣

▲師弟の契約とありてい 師弟の契約と師とい
周礼曰為人之長訓物之規名師長矣 弟子遺教
經節要云学居師後改言弟解從師生故称子矣

▲筑波山のものもの乃花さなり

筑波山ハ在常陸國筑波郡海邊之山也山峯有筑
波權現号稻村權現男躰女躰兩宮有間之山号雄
筑波女筑波祖武天皇朝徳一上人當山開基而後
万卷上人勸請權現為鎮守云云
詞林系系云大照大社此山の嶺ゆく紫の筑波うと
深と信ふ小至水波曲森溜の浦波系を花さなる水
山の巖ふ系より依て而云波山而因て名筑波山と
古今秘抄云筑波山の麓より山より木葉よりさなり
付るなる色は竹葉の中と云又此山の麓小大池を
常小波とらやすと依て筑波山と云と云々

或云此山昔深山中と月光の影ぞゆく月本影を
袖中扱ふ六のもりのもりのこ乃おもりのとをこえし
ありしおとこ。とてこもりのあまて。つるるるあまていり
又小池よはる

▲雲の林乃陰あけき。花ををふたつくまじ。花のよ
乃ららるるびらとを雲の林といえ

▲緑のそもろのふや。童蒙扱云樓炭経日頂弥六
四宝のるせろ処之中畧東面ハ黄金西ハ白銀北ハ
水精南面ハ瑠璃也。このも瞻浮列の室ハ碧瑠璃
こく緑小又ゆらこく

▲面白ハ之痛小波と。くくくハ角田川よはる

▲花らまろあのもくくとあまの山もまらるくあまら
古今集ま下深貴父あて。詞云云生生の晦月こ小
ふと越るる小山川よりを乃流さるるとありこく
古今集雅抄云菅川小波のちりあふあこくいて流さ
あつと束ゆけがふよのまもろく。さびーくくんを
まもろく成るるとこすふくハ流さるとま

▲花を教りハ河の名流小ハありさ。室小波とく
古今集ま下貫之客。なふ小の教わハ河のくま。又
ありの波とまら。洞云小亭子院の歌合の客とま。茶
雅抄云茶の教わらハよさ。うてまふ小波乃そん
くくく

▲散八洞乃川やうん 洞川の伊勢の名不らんた。夏は只洞
斗とつり。洞川のゆ浮舟小流と

▲馬ひねるくふつう乃海山都て箱崎乃。浪立せく須磨
の浦。又ハ駿河の海とく。常陸とくやと下りてぬ

舟をよみてふまをこをくありの。子を馬ふありなり下。
源氏常^{トニナシ}を小迎江の志がふふ

「割港の駿河乃海の須磨の浦浪立およ箱崎の江
此方とりてつづり。箱崎ハ筑前く夕歌小流と

須磨ハ摺込く。駿河玉ハ之井寺小流と

▲名小流さくろ櫻川とて 名小流さくろといはるる名不の
を示して今小つてふ抄とてとく。無名抄を昔の
た為林約一についてふ井よりふ吹とて名小流さくろ
をくさく

泰
。風吹ハ浪もき重の櫻川名小流さくろあのみまうか
後九条
内大臣

▲あまさくろの鄙乃長路小妻ハ ありさくろの鄙ハ乃明あ小流と
古
。あひまや鄙の長路小妻へく巻のなるとふふりせんハ
童朝臣

▲おもろとくまハ柏崎小流と。を菟一とハ歌波林の舟をりて
つづり。歌波小流と。湯作ハか後小流と

▲我故の赤林とハ此歌候屋姫と尸て赤林の橋本とて公
故といは橋子う故といは日向玉とて赤林の赤名と赤

岡耶姫と尸て小赤林と橋本といふかへ
木花岡耶姫神社在日向国児湯郡号妻満宮

徒前より川の橋川とてしりしは元開耶那の津代とある日
向ふよりあつた橋ふあ津之依之^三當新よ高川めりて

▲名小あふの川に流るる費之の踐通小はと

▲草のりもまきふむれは橋川波のむをまらるるまきめ

後撰集小貫之^六詞云は橋川とて云ふ所のしり

ととく波のむといふまらるるを云は橋川の川は

らり流るるを波のむといふとて

▲名小あふの川に流るる費之の踐通小はと

云促迫也^矣 廣韻云迅也速也至也^矣 增韻云

短也催也^矣 琵琶行云促絃絃轉急上下界

促之の浮流の多法也。促之の那の名也

常陸国風土紀云黒坂命征討陸奥蝦夷事了黒坂

命遇病身死葬具儀赤旗青幡交雜^ハ飄颻雲飛虹張

堂野^ニ糴路時人謂之幡聖国後世言便称信太国^ト喜

▲うりく水の花 水の花の水のむといふはまゆくの

橋の花の川に流るるを云は

▲こさあまの 三井寺小はと

▲花のこさあまの 三井寺小はと

と云ふは妙の田村小はと

▲花の下小ゆらんを云は

白氏文集十三云花下忘帰因美景樽前勸醉是春

風矣 忘る水の都及^レ抄の及不るは是の

詩の流をうけてあまのつらり

▲水流花落春在鎮月冷風高鶴不歸 澄文未考

▲岸花紅照水洞樹翠含風 旧抄小杜子美詩也

▲山花開似錦洞水湛如藍 碧岩九云僧回大龍色身

敗壞如何是堅固法身龍云山花開似錦洞水湛如

藍 矣

▲二樹の流一河の流也 千壽山流也

▲年と流と花の境とつらあハ教うらやや思ふらん

古今集巻上伊勢が歌に河を云ふ所のつらやは

さつらつらとせよありとて。兼雅抄云後のたぐまれの

思ふ相なれど是の年と流と花の境とつらあハむの

教うらや思ふらん

▲教ぬまの流のわくふらりの花とあひあるもの

古今集相名小く少とある遍照亦不

教ぬまの流のわくふらりの花とあひあるもの

兼雅抄云教と後の花とつらある花とあひあるもの

らとてつらあるもの花とあひあるもの

門無動寺のつらとて。尊のまの乃らとて。似たりと

て。一流くふ思ふ。らんとて。紫色よ花の

檣葉とて。

▲摘らりゆふ教ぬまの流のわくふらりの花とあひあるもの

古今集巻下菅野高世亦不

まひらりやふらりのくみ酒をましくなるりかやく赤の
ふらりとふらこ

▲常陸帯のりと中に散花をあふふらことあをせき

新石 吾路の比のこそなるひらりやうこし斗もあひんそあふ後念

東野別えりことひらりごと。又、かーのり。又かこつけ。又

りらららるるるるよらこ。此のりのことい誓言言と

かーのりこをうけてよめること。袖中拵えかこ

と斗とららゆらゆらよらせり。帯よらことえお

のあこびりこといんまらうよひらら帯といひらら

叔は遠のりこといもかーとえる。かーゆ散花を

もあふふらとまらと。又、本は用郁娘の流津も

ららら誓言言と。一、奥義拵え常陸玉森路

明神の糸乃日彼、糸の女縁ヲシチエシとらららんとて帯を

帯ゆらこ一ッふらけらうすの男の名とを。一ッふらあ名

とちとく襟帯もく統トウとをけて帯を折らとく名とい

源カサ。糸ヒをふ小袋ひ合とららら。源ヒうらへは縁ヒるら

ともれぐ小むとりね。よららこふらけ帯の中ふ

流ヒいつるら。それを肩カサふらけとゆらこらう

當社祭年中有七十五度中有常陸帶祭其日書記

男女名於布帶置神前社人取授之相見以定婚姻

▲流の志うらこひらふ流の多く散らると。志うらこ

流の志うらこひらふ流の多く散らると。志うらこ

流の志うらこひらふ流の多く散らると。志うらこ

見よとてうりたるりきりくくくおまを将よぼせりけす
もの難波ふはせ

^千〇橋らるあのみよにせむいひのきむまうしむちつらなる ^終

〇橋もよひくくふい

^百〇まき風の夜のつりどしむとあけつらうやうりふく及ん好

〇橋小くちのあせむいあくと 袖中抄云くちの水との神

社小籠をまてなまれるあをえん社小いりやととさ

あり。此りあの水よ社乃くちよりあひて社あとして

春つ色は有るゆえなるの情ふあうりくふなるとさ

定家ゆはえよるく縁なりのあくと社法よ限へり

らりせとさ

^{佳言}〇月夜いき小くくく一な社坊のよるのあふつらつらと ^{清辨}

〇あささ様の料い 此方あり橋小波

〇あもらー凡もつらーちまらぞとふさ(い)たらり

^{かま玉集}

〇あもりし凡もつらー社法ふらむいりてさるふさささか

^{連分}

〇あもらうさささや凡乃ささか人

^{中郎將} 行助

〇庭のあふいかた橋 源氏野分書云ああのみよりのあり

あささ様の咲くしんるをさるふをさささ

増境云えとく庭のよ乃くをささく社少いおる

ぬへくしんる 兼雅抄云かよ橋いりむ橋しんる

とやつら(目)くむささくくさぬの色ありて藤芳

あくくううと色あのをさるい橋しんるのさか

うもゆくハ、いりぞ此君小似る人もやしが不
 して、妹イヒの浮舟と名づくうゆふ玉ゆくと然
 るを句ホフと名づくのまは此君とこそあゆひし
 よりおのふかや。うゆふおのうしと兼大お
 のまゆとて一夜をゆくと。なましとまのび
 くよりよひゆふ。此ゆ大おかのゆゆひて
 ぬくじうゆゆんとおがしとてそ月意あり。
 又と名づくのまも兼よりえよ兼じうんと
 のゆひりまじ。浮舟のふおも二ジまよまふく
 してゆとちらゆひて。兼と名とてゆゆは
 ありと名づくのゆは名と名けゆゆんと兼し
 かり兼と名づくゆゆと。おの気さゆひてつま
 じりしと長セ苔の親者乃おのりめらりゆ
 ともや。命つうらめて木の根よ臥居ゆくと
 を横ヨカ川の傍に母りうとておつまをせよりの
 下ゆふ。うゆふは名りしと兼。是をを見付て。小
 野へつまゆり。か持るごとくゆふふるを
 ゆくと。ゆゆと名づく傍の兼化よあづりて。
 尾ビ山と名づくゆふ。妻く浮舟と名づくり
 是の法玉一見の傍ゆくと。我世は初瀬ふひ
 してゆゆと名づくゆゆと名づくゆひし
 一尺の傍の横川の傍にゆゆと名づくゆゆと。

浮舟

と習、あそむを以横川よりふぐりの信那と
りひていしうとさ人伝たり。八十のまりの
母、又十才のいりうとりりり。あき、
て初瀬ふふふでりりり。河海抄云ふ
うりの信那とい、恵心、信那、道世の、横川、
隠居、一、あひて、号、横川、信那、母の、う、妹の、
貴の、尼乃、う、お、似、う、と、う、
よ、習、あ、ふ、小、井、の、尼、と、い、ひ、く、よ、習、の、
と、や、う、い、い、く、

檜原の三痛小紀と

初瀬山夕とそをて若とくは痛の松あり秋風とく

まろの松も立別き、よ習あふよ習のま乃

「むらむらとせふつら」のうと、初瀬の松も、う、

花鳥餘情云此二本の松は、白宮葉大木の二

のうと、う、い、く、
紙に、入、楚、云、此、院、不、用、之、

初乃、拾、り、也、是、を、也、
狗、ハ、山、城、相、承、也、

大、狗、下、狗、と、く、も、也、大、狗、ハ、子、尾、村、の、南、本、

の、後、乃、少、を、云、下、狗、ハ、本、津、川、の、西、坂、是、乃

南、下、狗、村、あり、支、村、川、を、隔、て、也、

。山、城、の、狗、乃、う、う、と、う、
山、城、の、狗、乃、う、う、の、地、根、と、

東尾をえ敷りしぬ多山おらひのう縁とや
いしよかせく見ゆらんとうき。

敷りしゆしえ羽源氏供書小流と

▲光原氏のお借 源氏供書小流と

▲里の名とさぐりつひー人もねあき

椎本^{（注カキテ）}をえうしめーとえ人もりりら。里の

名のりんこむつまーうおかさることうき。

玄肯抄え里の名という治をいり。表撰が

家唐ハのおとあくしてう治をうもいりふ

りりしうき。浮舟をふ浮舟の君乃あふ

「里の名と表はあきといふ橋のう治の場りといふ縁と

叶方新拾遺小歌あつた。紫衣部とうき

▲橋の小流の橋とん後せ 浮舟をえこまらん橋乃小

流とりてまき 橋の小流がさといふ杉政小流

換^{（注カキテ）}結の香や橋の橋の小流ふまき。夜半の浮舟

▲河のまをらんの夕煙 推本^{（注カキテ）}をえ故大及あつた

不い海よりあらしうき。河海抄えとらん

まきといふ。式ハ又あつたことえらんも用ら

しうき。とらんの里杉政小流と

▲ふい流をうけすくもーとせいせいふ

浮舟をえふい流をうけらるやうふしうき。

是ハ玄鏡のえ浮舟をつまねひ川白乃

黒くつらむいあしき

推本^カあるの

月つらむいあしき

さやうあしき

あはれいあしき

汗の氷あしき

ぬはあしき

「夏の書けの氷あしき

涙の氷あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

あしき

のひぢり乃由母のうらうらと少時不修路
ついでせりやとあくせせり。よ智、あをひく
坂中少時、あふふとせし修ひりり
うらうら海杖、あふふとせし修ひりり
とせし修ひりり、比叡山のあ坂也

あふふとせし修ひりり、比叡山のあ坂也
名あふふとせし修ひりり、比叡山のあ坂也
比叡山のあ坂也

復東注、梅聖俞詩云獨護慈母喪淚與河水流
河水終有竭淚痕常在眼 矣 よ智、あをひく

うらうらとせし修ひりり、比叡山のあ坂也

とせし修ひりり、比叡山のあ坂也
とせし修ひりり、比叡山のあ坂也

あふふとせし修ひりり、比叡山のあ坂也
あふふとせし修ひりり、比叡山のあ坂也

あふふとせし修ひりり、比叡山のあ坂也
あふふとせし修ひりり、比叡山のあ坂也

ひとり相おそろひーりりーりりーりり
 仍さてもさへことよめるこのちりよはるさ
 さーあらーなりーりりさういもすも
 りきて。ゆりつらんも申さぬとらづり
 世ふ夫らんとあひまーと。あしりまじら
 て人小足付くせんらりハ。鬼も物も食て
 夫とくことつひつ。つとくと君さうーと
 いとさうげなる男のようまをそ。いさゆん
 おのが汗モトーとつひとてさうら地のせーと
 多し家えー人の志流すとありーやと
 よりん地すもひふらりさう

是ハ淳舟の君小舟少く相の氣乃さうて本體小
 ぬとぬおのるを。ありひおせーるこ。あし
 皮えー人といふ氣のるをさう

あふささるさのるもあうく 八雲抄抄えあさ
 さるさいささるもさうくさるもさう

孟津抄えあふささるささるささるささるさ
 詩關雎篇曰參差荇菜シシタルカウサイ宛右流之矣ユクノオレニニエト

朱子曰或左或右言其方也矣

古
 我らのりーさうも後まーや
 ちんふとてささるささるささるささるさ
 ささるささるささるささるささるさ

通材集云家りのりーさい。あう人うなりさう

ぬ、今、い、ま、う、り、さ、ん、と、の、り、の
よ、お、ま、さ、ふ、ま、い、

▲初瀬のあふり小横河の信朝不見つりき
横川の信朝のふよふ記を、浮舟のまおの流
と、し、れ、北院の庭のふ流小居抄ひーと、尼君
初瀬ふこりり抄ひー一、親書のきりさせ
抄ふふありとて、小野ふともむひうくし、
いのり加納しとて、ふいふ抄ふお抄ひと、
よ、お、ま、さ、ふ、ま、い、

信朝の取政ふ流を、加持抄の流の葵ふ流を、
初瀬の信朝ふ流を

角田川

世傳班シヤウの信シノ小信コシノを、角田抄、北、墨田川シノは、信シノを、同
の、角田ツノ人ヒト、と、又、又、信シノは、信シノの、信シノ乃、信シノ女メを、
も、信シノは、信シノを、信シノ女メも、同ナニ一人ヒト、子コ二人ニヒトあり、
と、梅ウメ君キミ、背セと、信シノ君キミ、と、父チチの、お、お、の、お、お、の、お、お、
松マツ君キミ、の、天アメ物モノよ、と、り、れ、見ミ梅ウメ君キミ、の、ひ、と、高タカ人ヒトよ、と、
り、れ、と、路チ外ソトの、と、と、り、る、母ハハの、心ココロい、と、ん、方カタと、り、る、多タれ
る、り、る、だ、と、し、角田川ツノと、し、ふ、お、と、し、伊路抄イロは、信シノを、
し、お、つ、り、さ、り、と、り、ん、都ツ多タと、と、と、と、と、と、と、と、と、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
下總シモツと、記キせ、り、信シノ宗ムネ紙シ抄セウよ、の、武タケ義ギ國クニよ、の、抄セウ、

角田川

葉むらゝ隅田川の古木下総管節、那とひ作人
より、當時の武臣を為す那不屈、本母寺の待乃
縁よりくさり、此、信より武蔵、角田川、他りいなる
る、此、根川、河へ入、同川の遠色の事、一、名、三、屋、戸、の
と、上、総、より、河、根、川、流、る、より、河、成、る、自
の、後、た、ま、を、あ、ま、り、て、も、名、う、り、り、。 荒、惠、小、玉
紀、ゆ、え、こ、さ、う、こ、の、初、多、越、の、前、越、して、角、田
川、より、う、ひ、ぬ、ら、東、の、名、へ、下、総、の、名、へ、ひ、さ、し、よ
け、り、り、利、根、入、同、の、二、河、お、ら、り、く、る、あ、ま、。 彼、あ、る、こ
後、あり、本、乃、諸、よ、迷、捕、る、る、の、流、よ、孤、村、あり、水、面
悠、々、と、て、あ、る、よ、ひ、と、く、。 晚、鹿、曲、江、よ、流、色
帰、帆、野、を、と、く、る、が、く、。 下、畧

梅若塚在河東岸下總之地、梅林、本母寺とて
有、存、る、。 河、弥、陀、こ、か、の、柳、乃、本、へ、括、て、朽、木、海、も、
毎年二月十五日、此寺よおしく大念仏あり。又河
の、と、ろ、こ、武、臣、の、地、後、芽、系、總、泉、寺、の、本、よ、母、の
塚、あり、。 妙、亀、山、此、所、よ、鏡、の、池、と、云、あ、る、。 母、梅、若
丸、と、名、あり、。 絶、よ、此、池、よ、丸、と、投、して、死、と、し、い
へ、り、。 今、の、地、も、な、り、。 万、葉、集、下、卷、基、法、師、が、小
「亦、并、心、又、翻、り、く、廬、崎、の、角、の、川、系、よ、ひ、と、り、る、後、ん
待、乳、ふ、も、の、を、流、も、下、總、ふ、こ、。 又、角、田、川、よ、日、名、あり、
并、陸、抄、よ、駿、河、系、よ、り、く、く、」

紀奇名待云山遠雲埋行客跡兵とをくせり

▲いく雲く乃乃をくしぬくさくしりねふ

系より武忍と云不有る所の山城お板突

勢忍鈴麻突を以新居突伊豆新居根突同是掘

突駿只清見此内新居新根の二突は遊世

せりるくお板鈴麻是掘清見の上古よあり

よて今の名のそゆま

▲若小おあい 江戸よはる

▲くくくく 武云くくくくくくくくくくくくくく

北どなきくくくくくくくくくくくくくくくく

云くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

雲ゆくくくくく 不怪とさてけくくくくくく

▲人乃親のくくくくくくくくくくくくくくく

後撰集雜一兼傳釣后あくくくくくくくく

大和お保よ堤中納言のあくくくくくくくく

系十三の侍子乃母いくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

ぬげさゆひたり板帝いくくくくくくく

▲くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

新古今集恋歌よ入 東野あ川い侍よねとく

くくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくく

ありてくも依ゆるよりのちみ人のそ経てくもつ
くー侍よ。あしといわしうもまよあつーし
自僕哥^{ジカシカ}流^{リウ}え侍乃^シををわよがよつーし。ほこる
と人^トをわくちあつて。或^モえそ^ソ以^ニ慈^ニと云^ク歌^カこそ
▲ま^マ着^ツる^ル系^{ケイ}乃^ノ病^{ビョウ}の^ノよよ

新古今集よ慈徳和尙あふ
「家^カ無^クい^ハね^ハ小^コ河^カの^ノ條^ノの^ノくま^マ着^ツる^ル系^{ケイ}は^ハ風^{フウ}さ^サつ^ツこ
上^{カミ}よ^ヨう^ウの^ノや^ヤら^ラる^ル風^{フウ}さ^サよ^ヨも。ね^ネふ^フま^マ着^ツる^ル系^{ケイ}と^トつ^ツけ^ケね^ネか
此^{コノ}系^{ケイ}を^ヲま^マふ^フく^クそ^ソて^テま^マ着^ツる^ル系^{ケイ}と^トつ^ツけ^ケね^ネか

▲是^{コノ}の^ノ都^ト小^コ白^{ハク}河^カは^ハ年^{ネン}終^{シユウ}く^クとも^トあ^アる^ル女^メあ^アる^ルが
白^{ハク}河^カの^ノも^モ禪^{ゼン}寺^ジの^ノや^ヤら^ラる^ルあ^アる^ル流^{リウ}さ^サく^ク。之^{コノ}系^{ケイ}鴨^{カモ}川^{カハ}へ
流^{リウ}さ^サ合^{カヒ}て^テ此^{コノ}流^{リウ}れ^レを^ヲ流^{リウ}り^リて^テ小^コの^ノ地^チと^ト小^コ白^{ハク}河^カと^トい^イひ
あ^アの^ノ地^チを^ヲあ^ア白^{ハク}河^カと^トい^イひ^ハし^シり^リ。又^{マタ}此^{コノ}系^{ケイ}よ^ヨ大^{ダイ}白^{ハク}河^カと^トい^イひ^ハし^シり^リ。
白^{ハク}河^カと^トい^イひ^ハし^シり^リ。

▲色^{シキ}坂^{サカ}乃^ノ実^ミ 田^タ村^{ムラ}よ^ヨ流^{リウ}ま

▲安^{ヤス}や^ヤう^ウこ^コ不^フ親^{シン}と^ト子^シの^ノ心^{シン}あ^アる^ル別^{ベツ}は^ハ色^{シキ}と^トい^イひ^ハし^シり^リ。
此^{コノ}系^{ケイ}の^ノ別^{ベツ}は^ハ色^{シキ}と^トい^イひ^ハし^シり^リ。家^カ流^{リウ}牙^ガ五^ゴ曰^{イハス}孔^{コウ}子^シ衛^{エイ}国^{クニ}よ^ヨと^トい^イひ^ハし^シり^リ。
時^{トキ}且^ツ是^{コノ}よ^ヨ哭^クら^ラる^ル者^{モノ}あ^アり。孔^{コウ}子^シ顔^{ガン}回^{ヘイ}問^{トク}答^{トク}云^ク此^{コノ}あ^アる^ル
死^シ別^{ベツ}は^ハ色^{シキ}と^トい^イひ^ハし^シり^リ。生^{ナマ}て^テ別^{ベツ}は^ハ色^{シキ}と^トい^イひ^ハし^シり^リ。孔^{コウ}子^シ何^{ナニ}を^ヲい^イひ^ハし^シり^リ。
是^{コノ}を^ヲい^イひ^ハし^シり^リ。及^{マタ}云^ク植^{ウエ}山^{サン}乃^ノ鳥^{トリ}生^{ナマ}四^シ子^シ羽^ウ翼^{キョク}既^イ成^{セイ}將^{マシ}
分^{ワケ}干^{カン}四^シ海^{カイ}其^{ソノ}母^ボあ^アる^ル心^{シン}あ^アる^ル是^{コノ}小^コ似^ニら^ラと^ト其^{ソノ}後^{ノチ}人^{ヒト}
と^トい^イひ^ハし^シり^リ。不^フ遠^{エン} 土^{ツチ}界^{カイ} 白^{ハク}氏^シ文^{モン}集^{シュ}六^{ロク}十^{ジュ}六^{ロク}曰^{イハス}

形雖異類心則同歸四鳥分飛聽音既辨有信

▲ 乃乃采やん武苑の玉と下つきの中ふあり角田川

もはきんたり 乃乃果やうんとい新古今集通具

武苑此いゆけ秋の果れるさいのなるのあはゆん

と云ふをさくこくつり 伊勢物語云於ゆきと

武苑玉とあもつゆきの玉らの中ふいと大さなる河

あり。乃乃と果田川といふ下果 下総国ハ遊り柳

あゆとこを志ゆ川あきとよむと此徳よふの字を

畧しより惟法抄云つ文字法つさるる小流り

てよとつけり。之光院ハ流くよと流るる

九禅抄云ふ文字うとすやうやうふよむべいと

右今光惠抄云他家説云葉平ハ不下其時二条后

其外様、密通の替り依と取るを流の流定有

いと二条后の兄国純基純流飛の由を授流いと

彼、二條の間ハ隠しあがる。国純ハ武苑守基純下

総守畧二人の国守の今の白川の流と。法勝も乃

那よりハ流まじる河を括と。あ玉の中ふゆと角田川

と号す也 此説當家云云 冷泉流伊勢注云武苑国

と志もつさ乃玉と至と云ハ長良中納言武苑守

よ吹田河乃小又あを流りて流るり。国純ハ下総

よてあのをこよ家依いと流るり。これと武苑下総

の中と云くまるとたとい吹田といくみと同聲なるが

故よりすこしづつとさし

新撰哥枕云貞観七年

四月九日若毒(意)深宣旨宣つれ^{キヤキ}后の^{キヤキ}見

長良川の^{キヤキ}男堀河実白照宣云基経朝臣^{キヤキ}被

作射^{キヤキ}なるを彼人^{キヤキ}やうしく情^{キヤキ}ある人^{キヤキ}とてあつ^{キヤキ}よのを

て^{キヤキ}か^{キヤキ}く^{キヤキ}流^{キヤキ}一^{キヤキ}遣^{キヤキ}うん^{キヤキ}子^{キヤキ}あ^{キヤキ}や^{キヤキ}う^{キヤキ}く^{キヤキ}あ^{キヤキ}り^{キヤキ}く^{キヤキ}た^{キヤキ}れ^{キヤキ}の^{キヤキ}業^{キヤキ}身

乃母^{キヤキ}伊^{キヤキ}登^{キヤキ}内^{キヤキ}親^{キヤキ}の^{キヤキ}長^{キヤキ}息^{キヤキ}よ^{キヤキ}か^{キヤキ}り^{キヤキ}く^{キヤキ}る^{キヤキ}は^{キヤキ}く^{キヤキ}悪

かり^{キヤキ}く^{キヤキ}流^{キヤキ}門^{キヤキ}よ^{キヤキ}の^{キヤキ}赤^{キヤキ}入^{キヤキ}流^{キヤキ}一^{キヤキ}ゆ^{キヤキ}り^{キヤキ}け^{キヤキ}を^{キヤキ}奏^{キヤキ}を^{キヤキ}さ^{キヤキ}く

於異説多し

▲あふく 江によ流を

▲群の^{キヤキ}今^{キヤキ}とい^{キヤキ}ひ^{キヤキ}根^{キヤキ}人^{キヤキ}とい^{キヤキ}ひ^{キヤキ}面^{キヤキ}向^{キヤキ}う^{キヤキ}る^{キヤキ}ふ^{キヤキ}て^{キヤキ}見^{キヤキ}せ^{キヤキ}の^{キヤキ}根^{キヤキ}ぞ^{キヤキ}の^{キヤキ}後^{キヤキ}一^{キヤキ}此^{キヤキ}舟^{キヤキ}よ^{キヤキ}の^{キヤキ}せ^{キヤキ}や^{キヤキ}い^{キヤキ}と^{キヤキ}よ^{キヤキ}う^{キヤキ}う^{キヤキ}そ^{キヤキ}や^{キヤキ}る^{キヤキ}隅^{キヤキ}田^{キヤキ}川^{キヤキ}の^{キヤキ}後^{キヤキ}一

舟あふく日も昔ぬ舟よのれとて承りてくれ

伊勢物語云後ちとる舟よのれ日も昔ぬと云よのり

て後^{キヤキ}と^{キヤキ}と^{キヤキ}る^{キヤキ}よ^{キヤキ}皆^{キヤキ}人^{キヤキ}お^{キヤキ}つ^{キヤキ}び^{キヤキ}一^{キヤキ}くて^{キヤキ}承^{キヤキ}り^{キヤキ}て^{キヤキ}ふ^{キヤキ}人

の^{キヤキ}さ^{キヤキ}い^{キヤキ}し^{キヤキ}も^{キヤキ}此^{キヤキ}ぞ^{キヤキ}上^{キヤキ}書^{キヤキ}今^{キヤキ}案^{キヤキ}此^{キヤキ}お^{キヤキ}浩^{キヤキ}の^{キヤキ}後^{キヤキ}ち^{キヤキ}い^{キヤキ}無^{キヤキ}心

し^{キヤキ}と^{キヤキ}あ^{キヤキ}ふ^{キヤキ}作^{キヤキ}を^{キヤキ}い^{キヤキ}り^{キヤキ}く^{キヤキ}う^{キヤキ}ま^{キヤキ}と^{キヤキ}依^{キヤキ}て^{キヤキ}と^{キヤキ}る^{キヤキ}舟^{キヤキ}よ^{キヤキ}の^{キヤキ}進

日^{キヤキ}も^{キヤキ}昔^{キヤキ}ぬ^{キヤキ}と^{キヤキ}云^{キヤキ}此^{キヤキ}後^{キヤキ}ち^{キヤキ}い^{キヤキ}面^{キヤキ}向^{キヤキ}う^{キヤキ}根^{キヤキ}ぞ^{キヤキ}て^{キヤキ}人

せ^{キヤキ}よ^{キヤキ}根^{キヤキ}い^{キヤキ}づ^{キヤキ}い^{キヤキ}舟^{キヤキ}よ^{キヤキ}の^{キヤキ}せ^{キヤキ}や^{キヤキ}い^{キヤキ}と^{キヤキ}云^{キヤキ}よ^{キヤキ}流^{キヤキ}く^{キヤキ}角^{キヤキ}田^{キヤキ}川

の^{キヤキ}後^{キヤキ}ち^{キヤキ}と^{キヤキ}る^{キヤキ}舟^{キヤキ}よ^{キヤキ}の^{キヤキ}れ^{キヤキ}日^{キヤキ}も^{キヤキ}昔^{キヤキ}ぬ^{キヤキ}と^{キヤキ}い^{キヤキ}ふ^{キヤキ}け

ま^{キヤキ}と^{キヤキ}此^{キヤキ}お^{キヤキ}浩^{キヤキ}乃^{キヤキ}詞^{キヤキ}を^{キヤキ}う^{キヤキ}けて^{キヤキ}根^{キヤキ}ぞ^{キヤキ}乃^{キヤキ}と^{キヤキ}い^{キヤキ}ふ^{キヤキ}と

の^{キヤキ}せ^{キヤキ}げ^{キヤキ}た^{キヤキ}ひ^{キヤキ}ら^{キヤキ}り^{キヤキ}を^{キヤキ}後^{キヤキ}ち^{キヤキ}流^{キヤキ}く^{キヤキ}舟^{キヤキ}よ^{キヤキ}り^{キヤキ}も^{キヤキ}昔^{キヤキ}ぬ^{キヤキ}と^{キヤキ}云^{キヤキ}上^{キヤキ}書^{キヤキ}

。日^{キヤキ}も^{キヤキ}昔^{キヤキ}ぬ^{キヤキ}と^{キヤキ}云^{キヤキ}舟^{キヤキ}よ^{キヤキ}の^{キヤキ}後^{キヤキ}せ^{キヤキ}角^{キヤキ}田^{キヤキ}川^{キヤキ}の^{キヤキ}り^{キヤキ}も^{キヤキ}昔^{キヤキ}ぬ^{キヤキ}と^{キヤキ}云^{キヤキ}上^{キヤキ}書^{キヤキ}に^{キヤキ}満

十口抄云々毎々のれ日られぬ。浄家の本よの目れ字な
一。竟孝法尔の本よの目れ。花鳥井黄門乃去後へ
る本よの目れ。天子の浄家より目られぬと云ふ
ふまぶさる事と云く。九禪抄云目も其の御つ小
河浄家より除てよまぬをわると云。照日の本
とつふと忘乃故実也云と

歌のいさくハ園寺小町よはほと。業平ハ杜若よはほと
名水ハかつしよと云ふことりん歌も我か人ハありややと
伊勢相持よ業平雲田川よりてよありかへ。古くハ
旅の部よ入。相持前後よ入と云ふ。園鏡抄云此を
と云ハ歌もと云ふ。我故ハ乃名よと一入る川

うくあつり。歌と云名をかちちて名水ハあつり
あつハ歌の事と云へ。歌ハ人ハあつりて
ありややと云く。惟法抄同く

▲あまよはさるもの入る都てハ見別ぬ事なり
相持云さる抄もあまの事と云へとあり
と。略の事と云ふ事あり。あまの事と云へ。つと云ふ
系よハ人ハあつり。後まよと云
かれハ是る人ハあつり。と云へ

○みどりなると云とい赤うり。あまむ方の歌もハ
丙辰紀行云都多ハ角田河のわらま。好色乃人と
して家よ何と云ふと云ふ。よと云ふと云ふ

角田
あうさ鴨の大きなる。此鳥蛤を好みてよく食むる
ことよく。肖柏安を食むるハせぬハ黒く。腹ハ白
く。鴨のやうにて大きなる鳥也。

▲あまこけ沖乃かもめよ 鳧ハ廣韻云野鴨也 矣
和名迦毛免狀鴨よ似て鴨よりかましく。其色乃
羽有て雜斑。背の上は華文とおび。喙短く。
尾長し。脚卑し。て掌短し。數百為群江湖の
沙よりり。ちを蔽て群む其音風ぬの至が如し
見陸機詩疏

▲昔よゆの業多も有やみやする回も於の人を思ひ妻
物清く人わひくして系よみか人なむかも
此とくは是の業多心海をくくかろ墨田川
よ至り。於よ二三系のをとくしめを介のくを今
此訓よまくとあひむる也
後右
○於多ゆのそりんか人ありやみやする也 太上皇
▲同くそりぬいうそり於多ひるの多とわひてし

ひやういもの子と云々 爾雅云鳥子生須其母而
食謂之鷓鴣鳥子生能嚼食謂之雛 矣 字林云哺而
活者曰鷓鴣雀之類是也 自咏者曰雛雛雉之類是
也 矣 他家ハおとくそりぬあは田舎の名よそ
ろりく。鄙ハ田舎也
○事とくそりぬ月の角田川於のなとるるひもや

▲ひまじ山、後寛正頃、角田の某の傳記ある。言及るに、
此の安室よはと

▲乃の如く、のち成てまゝのまゝのまゝとせざるは

白氏文集云古墓何代人不知姓与名化作路傍土

年々春草生ス矣

指遺頁外。塚中てもせしきぬまのまゝとぬめて作るもあらん

▲あつひひるさきさきの尺さしうきまら

新古。そのまゝあせりよせらるるまゝのまゝといふてまゝあらん

此方と後々の袖中抄云々まゝといふてまゝあらん

俊之伴のまゝは信濃あまの境りの原あせると云

あまあせると云々まゝといふてまゝあらん

まゝといふてまゝあらん

まゝといふてまゝあらん

布施屋考国史仁明帝御宇東海東山兩道作渡舟

及浮橋又建布施屋矣陽成帝御宇為救百姓濟

度之難於越後国古志郡渡戸溪建布施屋已上未畧

私云布施屋といふは及浮橋をゆりて、此舟の人乃

舟と稱ひ、船、舟橋或は此舟とちりて舟人の舟家

と布施屋といふに流しとつてまゝあらん

▲人間熱の花盛り 若衆の衣け花の咲ぐごとく熱

歌の中心あり。文子曰有榮華者必有愁悴矣

▲無常の風 付法藏經曰猶為無常風灑流而不住

矣性靈集報四思德表白云每常之風忽扇四大瓦
 解矣三教指皈云每常暴風不論神仙矣 鴉鷺記
 云朝日草木花と冥のるるに至常の風は傷つる
 思ふ令る津ともしく今日有偏の處に代と 上皇
 名義集云梵音薩迦耶薩此云每常苟御曰趨舍每
 定謂之每常矣撰大衆論曰每常有三種一念々壞
 滅每常二和合離散每常三畢竟如是每常矣
 唯識疏釈云每常有二義一有生滅是每常二每
 他常故名每常一矣

▲生死長夜の月乃釈

唯識論の文の多し安んずる
 心鼓をらるる 心鼓い久樂意の由く倭名抄云

鉦鼓兼名苑曰鉦一名鏡金鼓也越王勾踐造也矣
 題額聖圖贊云鐘鼓道俗拍鐘也響似合鐘鼓故名

天台云臨終因鐘增其正念矣

▲鳧鐘

鐘の吳名也 周礼云鳧氏鑄鐘矣

▲南無や西方極楽世界三十六億同号同名阿弥陀佛
 龍舒浄土文卷四曰釈迦佛在世時有弱婆二人用
 穀一斗記教念阿弥陀佛願生西方佛云我別有方
 法令汝念佛一声得多穀之教乃教以念南謨西方
 極樂世界三十六億一十一万九千五百同名同
 号阿弥陀佛嘗以私穀校之一合千八百粒此数乃
 二千石之數佛自以地教二老人則其功德甚大可

